

## 展覧会「すべてのものとダンスを踊って：共感のエコロジー」批評 ——エコロジーアート受容を深化させる新たな「共感」理解

大久保 美紀（情報科学芸術大学院大学 [IAMAS]）

### 発表要旨：

本発表は、エコロジーアートの展覧会「すべてのものとダンスを踊って：共感のエコロジー」について、芸術を通じてあらゆる生命の技術を解釈する提案としての社会的意義を評価し、その重要性をより深く社会に波及させるための新たな「共感」理解の必要を主張する。本展は金沢 21 世紀美術館において 2024 年 11 月 2 日（土）から翌年 3 月 16 日（日）まで開館 20 周年を記念して開催され、美術館の長谷川裕子・本田あゆみ・本橋仁に、キュレーターとしてエマヌエーレ・コッチャが加わって企画された。植物やメタモルフォーゼの哲学を提唱するコッチャは、2019 年、カルティエ財団現代美術館における樹木の生に焦点を当てた企画展《Nous les Arbres》[私たち、木々] のアドバイザーを務めており、金沢の展示ではこの展覧会から継続する企画の方向性を読み取ることができる。

概要文によれば本展の目的は、「見えない存在との交感を通して、みずからもエコロジーの一端にいることを確信」することである。全てがデジタル記号と化した現代社会では本来見えているものが見えにくいという逆説的な状況がある。「ダンス」、あるいは「踊る」ことは、そうした情報を脱記号（脱言語）化するという価値観の転換であり、すなわち非人間存在に共感することを可能にし、脱人間主義的で多元的な生のあり方を直観的に掴むアクションの隠喩になりうるという。こうした考えは、コッチャ自身の提唱するメタモルフォーゼの哲学や感受性の思考に由来しているのみならず、その晩年を美術展企画に捧げたブリュノ・ラトゥールの惑星規模のネットワークの考えや、ティム・インゴルドらの多元的な人類学と密接に関わる点で重要である。一方、非人間存在と手を取り合ってダンスを踊るというメタファーが真に意味するものは依然として不確かである。発表者の考えでは、私たちの芸術的挑戦が「擬人化」「アニミズム」のレッテル貼りを乗り越えて社会に波及するために、「共感」についてより深化した理解が必要であり、「共感」を生に内在する技術として再考する視座を共有する必要がある。

発表では、以上の主張を明らかにするために、まず「すべてのものとダンスを踊って」という展覧会タイトルおよびそのコンセプトが鑑賞者に提起する生命観に着目する。その際、副題としての「共感のエコロジー」が、当芸術実践において、いかに解釈され展開されているか分析する。これらの考察を踏まえ、エコロジーアートがより深く受容されるために求められる新しい「共感」の理解を提案する。

### レファレンス

展覧会「すべてのものとダンスを踊って：共感のエコロジー」（2024.11.2-2025.03.16、金沢）

COCCIA, Emanuele, *La métamorphose*, Paris : Payot & Rivages, 2020.

BERGSON, Henri, *L'Évolution créatrice* (1907), éd. Arnaud François, PUF, coll « Quadrige », 2007.

LATOUR, Bruno, *Où atterrir? Comment s'orienter en politique*, La Découverte, 2017.